付録　浦野興治『諫早三部作』文藝時評集

『諫早少年記』
『諫早思春記』
『諫早夏物語』（※『夏休み物語―昭和篇』改題）

発売：右文書院
発行◆レック研究所

『諫早少年記』風媒社

少年時代の熱い思い　作家・佐藤洋二郎

わたしは大人よりも子どものほうが緊張して生きていると考えている。世の中が大人社会である以上、子どもの立場は弱い。あるいは青春時代という多感な時期ほどつらく苦しいものだと思っている。

あれをしてはならない、これをしてはいけない、勉強しなさいと大人に抑制させられる。好きな異性にもふられる。偏差値や内申書も気になる。人生に対して免疫が少ないので悩む。動揺する。世間を知った大人だと到底耐えられないことを忍んでいる。生きにくいのは親より子どものほうだ。

しかし年齢を重ねてくればくるほど遠い昔が鮮やかによみがえってくる。「苦中楽」という言葉があるが、青少年時代というものはそういう時期ではないかと思い返すことがある。苦しい時期にこそたのしみもある。アミエルという哲学者は「幸福の真の名前は満足だ」と言ったが、決してそういうことを得られない多感なころだ。

本書はそんな年代を描いている短編集だ。物語は日本がまだ貧しく、だれもがまだ豊かさを享受できないでいる、昭和三十年代初頭の長崎の諫早が舞台だ。こままわし、メジロ捕り、野イチゴ採り、村祭り、なつかしい光景が少年の目で描かれている。

けんかがある、友情がある。子どもゆえの残酷さがある。それはみな大人への通過点ではあるが、ことさらに郷愁をいだくのはわたしもまた著者と同じ団塊世代だからか。苦い思い出のほうが時とともに豊かな思い出に変わる。世の中はぜい沢になり、当時とは隔世の感があるが、わたしたちの心は逆に細っているのではないかと考えさせられた。

個人的には少年が少女の目をけがさせる「弓矢」、いじめっ子の上級生がいじめた子の矛で足を切断することになる「廿日えべっさん」が心に残った。いずれにせよ短編のどれにも忘れ去った時代への著者の熱い思いがにじみ出ている。

（長崎新聞（共同通信配信記事）２０００年1月9日刊）

「朋輩」（『諫早少年記』所収）

けなげな少年たち　文藝評論家・堀切直人

最近、私は短篇小説を読んで涙を禁じえなかったことが二度ほどある。そんなことは私にはめったにないことなので、忘れようにも忘れられない。涙は必ずしも人の真情をあかしするものとはいえないだろう。涙を流しながら、自分は愚にもつかぬ感傷に足を取られている、なんて安っぽい涙なんだろうと自己嫌悪をおぼえることも少なくないのである。しかし、私はそのときには、そのような安直さ、自己嫌悪をまったく感じなかった。

私が読んでいるうちに思わず涙がこぼれてしまった短篇小説とは、浦野興治の「朋輩」（『諫早少年記』＝風媒社＝所収）と森田和子の「ノクターン」（同人誌「裸木」23号）である。どちらも少年が主人公で、その学齢は前者では小学六年生、後者では小学四年生という設定になっている。この二作の作者はいずれも私と同じく全共闘世代に属しているので、両作の時代背景はともに昭和三十年代前半、一九六〇年ごろと判断して間違いないだろう。

「朋輩」の前半部分のヤマ場は、主人公である祐次少年と転校生である保との野外での喧嘩場面である。喧嘩はしばしば当事者間に友情を生み出すことがあるが、ここでの喧嘩はその種の性質のもので、喧嘩のあと二人は互いに「朋輩」の絆で結ばれる。そして祐次は保に誘われて後日、近所の空地で催されるサーカスを観にいく。保の家族は旅回りのサーカス芸人一座であったわけで、祐次の目の前の舞台では、保の姉や保自身がきらびやかな衣裳をまとって華麗なショーをくり展げる。また、ショーの前や幕間に、祐次は保の姉から温かいもてなしを受け、驚くほどたくさんのお菓子を頂戴する。だが、祐次がサーカスのテントを出ると、すでに日はとっぷりと暮れていて、これでは帰宅すると母に叱られるなと思うと、祐次は急に心細くなり、暗がりのなかをいっさんに駆け出し、せっかく貰ったお菓子をことごとく闇のなかに投げ捨ててしまう。

《ほんのさっきまで楽しかった時間が、まるで夢のようだった。塩せんべいも金平糖もかりんとうも明治のミルクキャラメルも箱羊羹も、それから優しい保の姉の笑顔もいらなかった。祐次はちり紙に包まれた食べ残しのお菓子を放り投げていた。祐次は懸命に駆けた。家に近づくにつれて、なぜか涙がこぼれ出てきた。上着の袖で何度拭いても涙は止まらなかった。玄関の戸を開け、母に怒鳴られるよりも先に、祐次は声を立てて泣き出していた》

「ノクターン」の主人公である平太少年は、父親の友人の家に、その友人の死後ひと月ほどして、父親に誘われて連れていかれる。この家で父親が今は未亡人となった友人の妻と話し合っているあいだ、平太はその未亡人の娘である小学二年生のなつみと、字隠し遊びなどして庭で遊ぶ。これをきっかけに二人はすっかり親しくなり、平太は父親に連れられてその家に遊びにいくことを心待ちにするようになる。その後、

平太の父親の会社は経営が苦しくなり、父親は自分の家を売り払って、たまたまなつみちゃん家の近所にある小さな家に引っ越さねばならなくなった。以来、平太は父親に町内の銭湯に毎日曜日、連れていてもらうようになる。その銭湯はなつみちゃん家の近くにあるので、平太は銭湯の帰りに父親がいつかはその家に連れていってくれるだろうと期待するが、父親は毎回、そのまま家に戻ってしまう。そこで、しびれを切らした平太は、ある日曜日の銭湯の帰りに、自分の気持ちを父親にぶつけてみる。

《その次の日曜日、僕は我慢しきれなくて、少し前を歩いている父さんの背中に向かって、「父さん」と声をかけた。「なんだ、またアイスキャンデーか？」。父さんは振り向いたまま立ち止まっている。「ううん」僕は首を横に振った。思い切って言った。「なっちゃんチに行きたい」。途端ドーッと涙が出た。僕は急に泣き虫になってしまったみたいだ。父さんは立ち止まったまま動かない。僕も泣いたまま突っ立っていた。少しして、父さんはまた背中を向けてゆっくりとウチのほうへ歩き出した。父さんの背中で結んだ浴衣の帯の先が風で揺れている。僕もゆっくり泣きながら歩いた。父さんは、また振り向いて立ち止まり、泣きやんできた僕が近づくのを待っている。そばに来た僕の頭に父さんは静かに手を置いた。父さんの掌の温かみが頭に伝わってくる。「男は泣くもんじゃないぞ」って言われるかと思ったけど、父さんはなんにも言わずに、二度三度、軽く僕の頭をたたいた。それからもう、なっちゃんチに行くことはなかった》

以上に引用した「朋輩」と「ノクターン」のどちらの場面でも、主人公の少年は心の緊張の高まったその極みで、ついに自分を抑えきれなくなって、いきなり泣き出し、そうするともう涙があとからあとから湧き出てくるのをとどめようもない。むろん私にも、小さいころにそうした張りつめた弓の糸が何かの拍子にゆるんだ途端、急に泣き出し、そしていつまでも泣きじゃくっていたようなおぼえはある。それで右に掲げた二つの場面にぶっかったときに、そうした感情が胸になまなましく甦って、涙があふれてしまったのだろう。

一読以来、私はこの二つの場面を、まるで宝物のようにかかえ込んできた。それにしても、なぜそれほど後世大事にしているのだろうか。

今日の時代の流れは大人と子供とを併せ呑んで、旧来のような地に足のついた生き方をきわめて成立困難にしている。この時代の流れに無抵抗に身を任せて、両足を宙に漂わせて生きている親子の典型は、私自身がそれに属している全共闘世代の親子であろう。「ノクターン」の父親は、子供とのあいだにつねに一定の距離を保っている。この父親は自分の子供にたいして必要最低限の言葉しか発せず、子供と一緒にどこかに出かけるときでも、子供にその後ろ姿を見せて黙々と歩を進めるばかりである。ここでは大人の世界と子供の世界とは、互いに一線を画してそれぞれの領分を守っており、決して相手の領域を侵し合うことはない。ところが、今日のニューファミリーの親子は境界線を無視して、互いに相手の領

域に入りこんでいっこうに恥じない。まず親の側が子供の活動圏まで降りていき、まるで友達同士のようにわが子と馴れ馴れしくし、子供と一緒になって最新流行がつねに幅をきかせている商品世界に、時代の流れから置き去りにされないように、自分を同化し一体化させる努力を日々続けている。

「朋輩」の祐次少年は、保の姉からいただいた「塩せんべいも金平糖もかりんとうも箱羊羹も」、ことごとく夜の闇の奥へ投げ捨てる。祐次が生きているのは、親が必要以上の贅沢を子供の心をかえって毒するものと目して、子供をその誘惑から遠ざけようと厳しく眼を光らしているような、輪郭のくっきりした世界である。親からそうした旧世界の倫理観を心にたたき込まれている祐次は、過剰なやさしさや消費の快楽を馴染んではならぬ異物と感じて、泣きながら体外へ排出してしまう。しかし、それから四十年ほどの歳月が経過した今日の日本では、祐次がかつてそれの課する規律にしたがって生きていた、輪郭鮮明な旧世界は無残に崩れ去り、異物であった過剰なやさしさや消費の快楽は人心を虜にしている。父親不在、母子密着、友達親子、不登校などの消費社会の病理が多くの大人と子供の心を腐蝕しているのである。

「朋輩」の作者と「ノクターン」の作者はいずれも、子供と大人が互いに一線を画していたかつての社会の記憶を頑固に握りしめて離さぬことによって、こうした当世風に抗って生きているのではなかろうか。何よりも二人の文章を貫く、ピーンと張りつめた糸のような緊迫の持続にこそ、今日のぶざまに形崩れした世界にたいする彼らの抵抗の姿勢が確実に見てとれるだろう。私が例の二つの場面を宝物のように後世大事にしているのは、二人のそのような姿勢に共感するがゆえなのにちがいない。

（「じょうほう通」1号　２０００年４月）

『諫早思春記』右文書院

少年期・不可侵の領土に向って―その光源が現在の境涯を逆照射する　文藝評論家・田中美代子

ケネディ大統領が暗殺され、ベトナム戦争で軍港が活気づき、若者のあいだではビートルズの長髪スタイルがはやり、やがて「全共闘」なる言葉が誕生してくる。……そんな時代に主人公・杉浦耕平は、高校生活をおくっていた。が、右のごとく社会は目まぐるしく変転しつつあったのに、故郷の人々の意識は全く変わらず、悪童連も呑気に暮らしていたのである。

だが長ずれば、時勢のおもむくところ、彼らもまた〝輝く日本の星〟を目指して（？）、都会生活に押し寄せる。……いわゆる日本の高度成長期、いわゆる団塊の世代の青春とは、そんなものだった。

それからざっと四十年、すっかり漂白された少年は、今では広漠たる都会生活の只中に居座り、おそらくは多忙な日々を過ごしつつあるのだろう。

そのせいだろうか。この主人公は今なお、繰り返し故郷の町に立ちもどり、高校生活を反芻するのだ。まるで昨日のこ

とのように。彼は多分、その光源によって、雑駁たる現在の境涯を逆照射する必要があるのにちがいない。少年期が終っても、否むしろ終っているからこそ、彼はその残像から逃れられず、何時までも二つの世界を生きているのだ。かくて変転つねなく、流れ去った時間の砂の中から、不動の岩肌が露出してくる。

剣道部の試合では、短躯にもかかわらず、耕平は奇襲作戦で成功し、その後あっけなく頓挫したこと。いつも町にたむろしていた悪童連。思いを寄せた少女たち。小遣いをくれる年上の女。幼い頃〈男女子〉だった、利かん気の里子は、卒業とともに東京の大学に合格して旅立ち、浪人生活に残された耕平は、間もなくその訃音をきく。……すべては瞬時の、光彩陸離たる思い出だった。

きわめて簡素平明な標準語の文体と、会話に粒立ってくる九州弁とのコントラストが素晴らしい。〈なお、方言の取り扱いなのですが、方言あっての「思春記」だったので、方言もどきを使うのはどうしても抵抗がありました。諫早地方独特のわかりにくい方言には標準語訳を欄外に書き加えました。ご参照ください〉との作者の注記。

わが国に流布するくさぐさの方言のなかでも、九州弁は、とりわけ怪異な語彙と言いまわしとで、他郷の人々を圧するかに思われる。外国語もどきに、訳語を要する所以であろう。

九州男児という人種がある。独特の臭気を撒き散らしながら、一向に悪びれぬ、天下を憚らぬ盛大な自己主張。余人は苦笑を浮かべつつ、いささかの揶揄をもって三舎を避ける。

というわけで、彼の方言へのこだわりが、一種特別なものであるのは故なしとしない。

他所者には多分、メルヘンめいた冗語にしか聞こえなくとも、彼にとってそれは、かつて我が地方、我が時の時に、自ら生きた特殊な青春、特殊な領土の、……決して普遍化されえず、他に代替することもできない、生々しい肉の絆を象徴しているのだろう。

さらにまつわりついて離れないのは、強靭な女族の輪ではないだろうか。「ひったたかれることば、しとるけんたい……うちはなんでん知っとっと」とか、「ばってん、そぎゃんことは、もうどぎゃんでんよか。あったことたい。うちが腹ん立っとっとは、すらごとば言うとることたい」などと、言いつのる恋人を、九州男児のほかに、誰が迎えうつことができよう？

そのせいかどうか、高校生活が終ると、真っ先に諫早を出て、都会生活に身を投じた里子は、見知らぬボーイ・フレンドと共に、バイクに乗ってダンプカーに衝突し、あっけなく帰らぬ人となったのだった。

（図書新聞　２００７年10月27日号）

『諫早夏物語』（※『夏休み物語―昭和篇』改題）
発売・右文書院　発行・レック研究所

個性と典型　歌人・染野太朗

自分の話から始めることをお許しいただきたい。

二〇一六年三月、僕は十二年間勤めた東京の私立中学高校を辞めた。特に理由があったわけではない。もう辞めたいと唐突に強く思い、とにかく辞めた。それで完全な無職になった。無職のまま、国内のさまざまなところを旅した。短歌の仲間を訪ねながらの旅だった。その旅のなかでまず福岡を好きになった。ここに住みたいと思った。そしてそのまま、その年の十一月に埼玉の実家から移り住んだ。福岡に移ってからも旅をつづけた。九州全県さまざまなところをめぐった。二〇一七年冬、一週間ほどかけて長崎を旅した。長崎市内・諫早・島原・南島原・雲仙・小浜をめぐった。これは自分にとって、長崎への四度めの旅だった。九州に移ってから、キリスト教弾圧の歴史や教会建築等に興味をもつようになり、それにちなんだ旅を繰り返していた。

雲仙でのこと。信者への拷問がおこなわれた雲仙地獄をじっくりと歩き、いくつかの歌を作り、しかしもちろんそこは雲仙であるから、温泉に入ろうとうろうろ歩いていると、あきらかに観光客向けではない、いかにも古そうな共同浴場にたどりついた。さて自分もここに入ってよいものかと入口付近で迷っていると、どこからかおじさんが出てきて「入っていくか?」と言う。一〇〇円だという。僕はうなずいて、その共同浴場の扉を押した。ごくごく簡素な脱衣場。浴場には、五〜六人も浸かれば窮屈に感じられるような湯船と、やはり五つほどの蛇口があるだけ。

ゆたかに注がれる白濁の湯にじっくりとあたたまり、硫黄の匂いをまとって脱衣場に出たとき、ひとりのおじいさんが唐突に、笑顔で話しかけてきた。今来たばかりといった様子で、あれこれカゴに放りこみながら、でもおしゃべりは止まらない。けれども僕には、その言葉がわからなかった。そのおじいさんが話す長崎の言葉の意味が、というより言葉の音そのものが、僕にはほとんど聞き取れなかったのである。「どこから来た」「よい風呂だろう」といった内容だということは辛うじてわかったのだが、大げさでなく、同じ日本の言葉とは思えなかった。こんなに親しく、優しく話しかけてくれているのに。わからないとは言いたくなかったが、わかったような返事をするのはもっといやで、僕は曖昧に笑うばかりだった。「また来い」「長く話してわるかった」とたぶんそのおじいさんは言って、浴場へ入っていった。

何度も旅をして長崎が大好きになっていた。キリスト教以外の歴史や土地についての本も読んだ。食を味わい、さまざまな風景を見た。けれどもそれはあくまで、よそ者としてのものだったのだ。いや、そんなのはじめからわかっていたし、言葉を理解できないという経験も特殊なものではないとわかっている。でも、そのおじいさんとのやりとりは僕にとって強烈で、僕はさびしいような恥ずかしいような、途方に暮れるような気持ちになったのだった。おじいさんはあまりにもあたたかく、それなのに遠かった。

浦野さんのまず『諫早少年記』を読み始めたとき、まだなにも起こっていないはずの冒頭から僕は泣いた。本当に泣いた。

その冒頭を引く。

段々畑の石垣にへばりつき、頭一つ出してあたりの様子を

窺っていた祐次が、「だいか来よらすばい」と、あとに続く茂と宗太に注意を促した。（中略）／石垣の上のそば畑には、祐次たちが狙っている独楽回しのひもにする真麻蘭が植えてある。濃い緑色をした剣形のかたい葉っぱで、ほぼ円形状に群生している。祐次たちはその真麻蘭を毎年、冬休みに入る前にかっぱらいに行っていた。だから、ここでもし人に見つかったら、冬休みで一番楽しい正月の独楽回しができないことになる。

ああそうか、僕には「物語」がないのだ、と打たれるようにわかったのだった。その土地に暮らす者が時間とともに身体に沁み込ませていくような「物語」がない。モノとモノが結ばれ、コトとコトが結ばれ、人と人が結ばれ、その結び目が歳月によってひたすらに増えてほどけてをくりかえす、時間軸に沿った「物語」がない。そこに住むということが前提となって身体化される「物語」。自分にはそれがなかった。浦野さんの文章は、諫早からいっときたりとも離れずに、つまり諫早という土地と人のなんたるかを知り尽くしたところからその「物語」を描き、繊細と迫力を併せもつ。そしてその繊細と迫力はもちろん、ストーリーではなく、諫早の海をはじめとした、登場人物たちの生活の場の、具体的な細部の描写に宿る。細部とは例えば、引用した箇所における「段々畑」や「真麻蘭」といったモノの提示はもちろんのこと、「濃い緑色をした剣形のかたい葉っぱで、ほぼ円形状に群生している」といったこまやかな描き込みを指す。そういった細部を土台にして、モノ・コト・人が結びつき「物語」をなしていくということのゆたかさが、自分はただ長崎や福岡を知識や風景として外側から眺めていただけなのだということを僕に気づかせ、自分と「物語」のあいだの縮めようのない距離に、呆然としたのだった。

そしてその「物語」は、『夏休み物語』においては、「昭和三十年代後半の、団塊の世代の人たちが小学高学年のころ」の夏、という固定された時間の現場を離れない。小学六年生の祐二（『諫早少年記』の祐次ではない）の視点から、彼が過ごした諫早のその時代の細部が語られる。

祐二は、少年としての「典型」と祐二としての「個性」を両立している。少年らしい、と手放しで言いたくなるようなまっすぐさと明るさと、そして、他の子どもには見られないような繊細さと独特の視点をもっている。その普遍的でかつ特殊な眼差しが、祐二の周囲のモノやコト、そして人を、やはりたいへんに「個性」的に描きながら、かつその時代や場の「典型」としても彫り上げていく。そのことがわかる印象的なシーンはいくつもあるが、例えば、祐二が家族で海水浴に行った帰り、アイスキャンディーを買う場面。例年なら麦わら帽子のおじさんと丸い黒縁メガネのおじさんしかいないはずが、その年は新しくねじり鉢巻きのおじさんもアイスキャンディーを売っていた。「アタリ」の棒もあることや、ねじり鉢巻きのおじさんが売っているのは天辺にスキムミルクが入っていてそれが十五円でちょっと高いことなど、当時の様子の言わば「典型」が、夏の少年としての祐二をとおして読者に生き生きと伝わるのだが、祐二自身がいざ買うとなっ

たとき、次のように描かれる。

……僕はねじり鉢巻きのおじさんのキャンディーがどうしても信用できないのです。スキムミルクが少ししか入っていないのではないかとか、初めから「アタリ」のキャンディーは入っていなくて、売れ具合を見てこそっと一本入れるのではないのかとか、いろいろ考えてしまうのです。

もちろん、自分の小遣いで買うからとか、一年に一度の海水浴の終わりを完璧なものにしたいとか、そういった心理のもとでのことではあるが、妙に繊細で臆病だ。ここに祐二という「個性」がある。

この個性をきっと十二分に分かっていたのが、被爆体験をもつクリスチャンとして描かれる、桃子おばちゃんなのだろう。桃子は、祐ちゃんは面白い、と折に触れて口にする。そして祐二の個性を見出すその眼差しは、桃子がもう子どもを産めない体となってしまって、それゆえに「出戻り」で、しかももし子どもがあるとすれば祐二と同じくらいの年齢だ、という状況によるものなのだろうと、物語の終盤に読者は気づく。さらに、そのような桃子の言わば翳の部分を、物語において明るみに出すのは、「姉ちゃんたちが言いよらすばってん、おばちゃんはヒバクしとらすとって……。そんヒバクってなんかん？」という、祐二の、少年の「典型」としての無邪気さであり、しかも、それによって自らの翳を反芻してしまった桃子に寄り添ったのは、「どんなに歯をくいしばって、涙をこらえようとしてもだめでした」という祐二の「個性」が流した涙であったところに、僕はこの物語の真価を見る。

最後に。僕が雲仙で出会ったおじいさんが話していたのであろう言葉が、浦野さんによって僕でもわかるような形で記されていることは、長崎や福岡における「物語」をもたない僕にとってたいへんな救いであり癒しであるのだということを付け加えなければならない。僕にとってその言葉との断絶は、思いつきで移り住んだ自分には「物語」が無いということを知るきっかけとなったが、同じ言葉によって今度は「ようこそ」と手を引いてもらったような気がしている。そして、その言葉の生き生きと躍動する『夏休み物語』という物語そのものが、僕にとって知識や風景でしかなかった長崎に、そして福岡や九州にも、〈時間〉と〈身体〉とを与えてくれた。先に「自分と「物語」のあいだの縮めようのない距離に、呆然としたのだった」と『諫早少年記』の冒頭を読んだ感想を記したが、実はその『諫早少年記』も含め、僕が生きたことのない時間と身体で、僕の知識や風景をぶ厚く塗り直してくれたのだ。人が生身で生きるその土地や現場そのものとともにあるのが時間であり身体だ。祐二の時間と身体が、僕に足りない「物語」を補ってくれるのである。――こんなにあたたかい「物語」に、僕はかつて出会ったことがない。

（「テクネ」37　２０１８年５月）